

# 高齢化での需要増対応

## 脳卒中患者用 療法士の労力軽減

いる人は10年の段階で全国に約170万人いると  
いわれ、今後も増加が予想される。大半の人はリハビリ専門病院などで理学療法士の指導を受けながら、運動機能の回復を目指している。  
ただリハビリ作業は理



学療法士にとって肉体的な負担が大きい。国内の理学療法士は10万人以下にとどまるとされ、現状より要介護者が増えるとの十分な対応が難しくなるとの指摘が多い。機器の普及で1人で複数の要介護者に対応できるほか、自宅でのリハビリも可能になる。

厚生労働省によれば、脳卒中で手足が動きにくくなるなどの後遺症が残る、介護が必要になって

高齢化に対応した新技術の主な事例

企業名	事業内容
帝人	自動リハビリ機器
トヨタ自動車	歩行支援の装着型ロボット
サイバーダイン	歩行支援の装着型ロボット
パナソニック	車いすとしても使える電動式ベッド
ワタミの介護	iPadで介護記録を管理
システムインストルメンツ	患者向けのリハビリ支援システム

## 介護ロボなどで新技術

### トヨタやベンチャーが開発

メーカー各社は高齢者の身体負担を軽くする技術を相次ぎ開発している。代表例である介護・福祉ロボットは手掛ける企業が多く、経済産業省は2035年の介護・福祉ロボットの国内生産額が4043億円と、15年見通しの24倍まで拡大するとみている。  
トヨタ自動車は病気が

などでひざがまひした人の歩行を助ける装着型ロボットや、体の不自由な人をベッドから運ぶために使う機器を開発。13年度以降の実用化に向けて、愛知県内のリハビリテーション施設などで実証実験を進めている。  
ロボットベンチャーのサイバーダイン(茨城県つくば市)も歩行を支援

する装着型ロボットを開発し、リハビリ施設でロボットを使った歩行訓練を実施している。パナソニックは簡易的な車いすとしても使える電動式ベッドを開発中だ。  
リハビリ関連の機器はメカトロニクス技術で定評のある日本では参入企業も多く、世界的に先行しているという。日本の高齢化は早く、今後成長分野になりそうだ。  
同時に医療費の増大を抑える意味もある。帝人の小型機器のように、在宅医療に関する新技術が普及すれば、現在は入院中に実施するのが一般的な治療やリハビリを患者の自宅で行うようになる可能性があるためだ。